

れるためには批判だけじゃだめだ。誰もが納得する答えが要る」

「誰もが納得する答え……」

森山は、それを口の中で幾度も繰り返した。

「批判はもう十分だ。お前たちのビジョンを示してほしい。なぜ、団塊の世代が間違ったのか、なぜバブル世代がダメなのか。果たしてどんな世の中になれば、みんなが納得して幸せになれるのか？ 会社の組織も含め、お前たちはそういう枠組みが作れるはずだ」

「部長にはあるんですか」

森山はきいた。「こうすればいいという枠組みを、部長はお持ちなんですか」

「枠組みといえるほどのものはない。あるのは信念だけだ」

半沢はいった。「だが、それはあくまでバブル世代の、いやもつといえどオレ個人の発想に過ぎない。しかし、オレはそれが正しいと信じてるし、そのためにいままで戦ってきた」

「もしよかつたら教えてもらえませんか」

森山は問うた。「それはどんな信念なんでしょうか」

「簡単なことさ。正しいことを正しいといえること。世の中の常識と組織の常識を一致させること。ただ、それだけのことだ。ひたむきで誠実に働いた者がきちんと評価される。そんな当たり前のことさえ、いまの組織はできていない。だからダメなんだ」

「原因はなんだとお考えですか」

森山はさらにきいた。

「自分のために仕事をしているからだ」

半沢の答えは明確だった。「仕事は客のためにするもんだ。ひいては世の中のためにする。その大原則を忘れたとき、人は自分のためだけに仕事をしようになる。自分のためにした仕事は内向きで、卑屈で、身勝手な都合で醜く歪んでいく。そういう連中が増えれば、当然組織も腐っていく。組織が腐れば、世の中も腐る。わかるか？」

真顔でうなずいた森山の肩を、半沢は微かに笑ってぼんとひとつ叩いた。「結果的に就職氷河期を招いた馬鹿げたバブルは、自分たちのためだけに仕事をした連中が作り上げたものなんだよ。顧客不在のマナーゲームが、世の中を腐らせた。お前らがまずやるべきことは、ひたすら原則に立ち返り、それを忘れないようにすることだと思う。とはいえ、これはあくまでバブル世代であるオレの仮説であって、きつとお前はもっと的確な答えを見つけてははずだ。いつの日か、それをオレに話してくれるのを楽しみにしている」

森山が慌てて半沢の表情を読もうとしたのは、その言い方が、どこか別れを予感させるものだったからだ。

「戦え、森山」

半沢はいった。「そしてオレも戦う。誰かが、そうやって戦っている以上、世の中は捨てたもんじゃやない。そう信じるのが大切なんじゃないだろうか」

人事部長の兵藤が、中野渡の専用車に乗って銀行を出たのは午後六時四十五分だった。少し相